

中将姫説話の展開

当麻寺中之坊蔵『中将姫絵伝』を端緒として

日沖 敦子

享保 15 年 (1730) に刊行された『中将姫行状記』(以下『行状記』)は、致敬が、当時流布していた中将姫の説話・伝承を集めて編纂したとされる勧化本であり、当時の中将姫説話の集大成として位置づけられるものである。『行状記』は、同時代或いは後世の中将姫説話に大きな影響を与えており、その影響は寺社が所蔵する絵伝にも及んでいる。当麻寺奥院蔵『中将姫絵伝』(明和 4 年〈1767〉成立、以下奥院絵伝)¹と当麻寺中之坊蔵『中将姫絵伝』(近世末期成立、以下中之坊絵伝)は、特に、『行状記』との関わりが深い絵伝として注目できる。近世期の中将姫説話の展開については、近年では田中美絵氏²、鳥居フミ子氏³、横山邦治氏⁴らの研究に詳しいが、本稿では、諸氏の研究に学びつつ、主に『中将姫絵伝』を端緒として中将姫説話の展開について考えてみたい。絵伝がどのように『行状記』を踏まえているかを確認し、特に、中之坊絵伝の特徴について検討する。中之坊絵伝には、蛇身となった継母の話が絡められており、青本『中将ひめ』、説経浄瑠璃『中将姫御本地』に繋がる一場面を絵画化している。また、他の伝本に見られる曼荼羅講説と中将姫往生の場面が確認できない点も特徴として認められよう。絵伝の持つ特徴が、『行状記』以外の文芸とどのような繋がりをもっているかについて検討し、中将姫説話享受の一端について考えてみたい。

当麻寺中之坊蔵『中将姫絵伝』について

当麻寺中之坊について

当麻寺は、浄土宗と真言宗兼宗の寺として知られている。今回、取りあげる中之坊絵伝は、当麻寺の山門を通り、向かって左手にある中之坊(真言方)に所蔵されている絵伝である【図 1】。中之坊は中将姫剃髪の地とされており、



【図1】当麻寺中之坊

剃髪時に用いたとされる髪剃や姫の髪で縫い上げられたという名号などを寺宝として所蔵している。また、中将姫が剃髪したとされる剃髪堂が本堂となっている。この剃髪堂は様式的な観点から、延宝頃（1673～81）に建立されたと推定されている。⁵ 中之坊には、寛文9年（1669）に住職であった実慶の奥書が残る版本「和州当麻寺中将姫御影堂再建奉加之序」が所蔵されており、17世紀半ばに堂社の再建に伴う勸進活動がなされていたことが確認できる。⁶ この版本には、姫が実雅のもとで出家し、堂（現在の中之坊）に17日間籠ったとある。おそらく、髪剃や名号などの寺宝と中将姫説話が関連づけられ説かれるようになるのは、このような堂舎の再建に伴う勸進活動によるところが大きかったのだろう。中之坊の由緒については古い史料が現時点で確認できておらず、17世紀初頭以前に遡るか否かは不明である。

中之坊絵伝の内容

A. 書誌

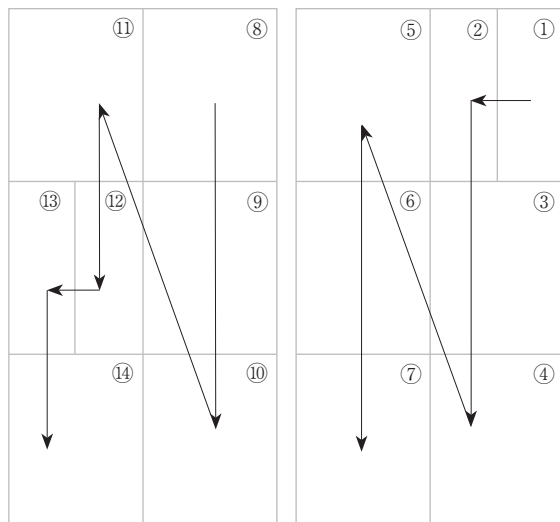
このように近世前期以降、中将姫剃髪の地という伝承をもつ中之坊に伝来する2幅の絵伝が中之坊絵伝である【図2】。簡単な書誌を示すと次の通りである。

紙本著色、2幅、寸法（表装含）197.0×144.0 cm、（本紙のみ）139.0×



【図2】当麻寺中之坊蔵『中将姫絵伝』2幅（第一幅、上）（第二幅、下）





【図3】中之坊絵伝の全体構成図

122.5 cm、改装済、背面などに墨書なし、桐箱入（墨書なし）。

近世末期から明治期の制作であると考えられ、現存する『中将姫絵伝』のなかでは比較的新しい絵伝である。しかし、近世期に一層多様化する中将姫説話・伝承がどのように享受されたかを考える上で、大変興味深い絵伝である。⁷

B. 中之坊絵伝の構成

中之坊絵伝の全体構成については、【図 3】に示した通りである。中之坊絵伝は各幅 7 場面、計 14 場面で構成され、上から下へと物語が進行する形式で場面が配列されている。各場面の右上には短冊が付され、場面の説明がなされている。しかし、残念ながら第一幅の短冊の殆どは、汚損・朽損により文字を確認することができない。各絵の場面を記すと次のようになる。「」は判読できたもの、（）で示したものは、挿絵から判断した場面の内容である。

- ①（豊成夫妻が観音の霊夢を見る場面）
- ②「□…□誕生□…□」（中将姫誕生の場面）
- ③（花園遊覧の場面）
- ④（山下载則が継母に命じられ、中将姫を殺害せんとするが誤って息子を殺害してしまう場面）
- ⑤（継母、誤って実子を毒殺する場面）

- ⑥（雲雀山で姫、殺害されんとする場面）
- ⑦（国岡将監が娘瀬雲を身代わりとして斬首する場面）
- ⑧「雲雀山御難之場」
- ⑨「豊成卿御殿場」
- ⑩「和洲瀧田川之場」
- ⑪「中将姫当麻寺ニ入玉フ場」
- ⑫「菴室ニ姫君住玉之場」
- ⑬「中将尼公蓮糸ニ取玉フ」
- ⑭「蓮ノ曼荼羅感得玉フ場」

中之坊絵伝に描かれた場面を確認していくと、その内容は、お伽草子『中将姫』よりも、さらに内容が豊かに加わった、物語性の高い内容になっていることに気づかされる。また、その内容は、享保 15 年（1730）に刊行された『行状記』に拠っていることが確認できる。『行状記』は、寛政元年（1789）・嘉永元年（1848）の後刷本もあり、近世を通じて読まれ、広く使用されたことで知られている。また、寛政 13 年（1801）刊『中将姫一代記』5 巻 5 冊（以下『一代記』）は、詞書のみで挿絵のなかった『行状記』を絵入読本化したものである。

『行状記』は、【表 1】にある明和 4 年（1767）以降の絵伝、つまり、『行状記』が記された享保 15 年（1730）以降の絵伝に大きな影響を与えている。『行状記』の序によれば「異説^{イセツ スクナ}少カラズ。事実亦略^{ジジツ マタリヤク}ニシテ来^{イマ}ダ委曲^{イキヨク}ナラズ」「曼陀羅ノ諸鈔^フ事縁、及ヒ年譜^{シヤキ}等差異スル者ノ多シ、予未^{フレイマ}ダ何レカ是、何レカ非ナルコトヲ知ズ^{シラ}」という状況であった中将姫伝承を、姫の誕生から往生までが記された書物を元に記し、一代記としたものが『行状記』であるという。近世以降、特に様々な諸伝が語り継がれていった中将姫説話の一つの集大成として『行状記』は存在する。

C. 中之坊絵伝が描く場面と特徴

それでは、中之坊絵伝が描く場面について、『行状記』と中之坊絵伝に先行して『行状記』の影響を受けて制作された奥院絵伝を比べ、どのような点に中之坊絵伝の特徴が見られるか確認していくことにしよう【表 2】。

【中之坊絵伝①】豊成夫妻が観音の霊夢を見る場面。『行状記』巻一には、「豊成卿、壮年ヲスギ、衰老ニ及ビ玉フト云ヘドモ、御子一人モマシマサズ（中略）スグニ長谷寺へ参詣アツテ一七日ノ間通夜ニ祈願シ玉フニ何ノ示現モナシ

年	所蔵先	名称	名称
鎌倉	神奈川・光明寺	当麻曼荼羅縁起	2巻
鎌倉	奈良・当麻寺	当麻曼荼羅縁起	2幅
鎌倉	和歌山・高野山清浄心院	当麻曼荼羅縁起	1幅
1531	奈良・当麻寺	享禄本	3巻
1633	奈良・熨斗勝一氏	当麻寺縁起(寛永本)	3巻
1669	京都・天性寺	当麻寺縁起	2幅
寛永以降か	奈良・当麻寺念仏院	当麻寺縁起	断簡
1696	和歌山・得生寺	当麻寺縁起	3巻、折本
1767	奈良・当麻寺奥院	中将姫絵伝	4幅
1830	和歌山・得生寺	中将法如御一代画伝	1巻
江戸末～明治	奈良・当麻寺中之坊	中将姫絵伝	2幅
近代	鳥取・大伝寺	中将姫絵伝	1幅

【表1】縁起・絵伝一覧

(中略) 後ノ七日満ゼントスル暁ノ夢中ニ正ク示現シテ言ク (中略) 果シテ紫之前程ナク御懐胎アリシカバ」とあり、姫が長谷観音の申し子であることがわかる。構図は異なるが、奥院絵伝第2図も同様の場面を描いていると考えられる。

【中之坊絵伝②】右上の短冊の一部に「誕生」の文字が読み取れる。描かれた場面からも、中将姫誕生の場面であると判断できる。構図は異なるが、奥院絵伝第4図も同様の場面を描いたものと考えられる。

【中之坊絵伝③】姫君が5歳の時に、花園へ花見に出かけた時の場面。向かって右側にいるのが姫と母紫ノ前、左側にいるのが豊成公と思われる。霊夢により姫を授かる際、観音からこの子が3歳の時、親2人のうち1人は必ず命は尽きると言われていた紫ノ前は、姫は5歳になったが特に何も夫婦の身の上に起こらないことから、仏菩薩の御告げも一途には信用できないと発言してし

まい命を落とす。この内容は『行状記』に見られるほか、奥院絵伝第8図にも見られる。

【中之坊絵伝④】山下载則が継母に命じられ姫を殺害しようとしたところ、父を思い留まらせようとした息子小次郎則重を誤って殺害してしまう場面。構図は異なるが、奥院絵伝第21図、そして、『行状記』を絵入り読本化した『一代記』第3図にも見られる。

【中之坊絵伝⑤】継母が、誤って実子を毒殺する場面。載則による中将姫殺害が叶わず、その息子小次郎則重殺害となってしまったことを悔しく思った継母は、お酒に毒を混ぜて姫を殺害しようとする。しかし、誤って豊寿丸が毒酒を飲んでしまい、継母は実の子を失ってしまう。奥院絵伝第24図、『一代記』第4図にも見られる。

【中之坊絵伝⑥】姫を亡き者にしようと継母が次の作戦に出る場面。その作戦とは、姫の父である豊成へ姫の不貞を知らせるという讒言だった。描かれているのは、姫が雲雀山で松井嘉藤太によって殺害されようとする場面。奥院絵伝第31図、『一代記』第5図に見られる。

【中之坊絵伝⑦】心優しく信心深い姫を殺害する事ができなかった嘉藤太は、小袖に自分の血をつけ、姫の斬首を証明しようと考え。しかし、その嘉藤太の話聞いた家老国岡は、疑い深い継母を説得するためには首が必要であると考え、自分の娘である瀬雲を身代わりとして斬首し、首を嘉藤太に預けることにする。この場面は、家老国岡が嘉藤太に娘瀬雲の首を姫の首として預ける場面である。奥院絵伝第35図にも同様の場面が描かれているが、中之坊絵伝は国岡が娘の瀬雲を斬首せんとする場面を描いているのに対し、奥院絵伝は瀬雲の首を国岡が手にしていることから、斬首後を描いているという違いがある。

【中之坊絵伝⑧】姫を失った豊成は悲しみ、雲雀山へ狩りに行く。そして、この雲雀山で豊成と姫は思いがけず再会を遂げる。この場面は、その再会を描いた場面である。奥院絵伝第40図、『一代記』第6図にも見られる。

【中之坊絵伝⑨】その後、豊成が姫を連れて邸へ戻ってきた場面。奥院絵伝第41図にも見られる。

【中之坊絵伝⑩】帝の悩みの種であった龍田川の鳴動を姫が止めるという奇蹟を起こした場面。この話は、近世に入って広がった奇蹟譚で、お伽草子には見られなかった中将姫による民衆救済の一場面として注目できる。この話は、『行状記』ほか、奥院絵伝第31図に見られる。

	中之坊絵伝	奥院	『行状記』
①	豊成夫妻、観音の霊夢を見る場面	有 2	豊成卿、壮年〈三十ヲ壮年ト云〉ヲスギ、衰老〈四十ヲ衰老ト云〉ニ及ビ玉フト云ヘドモ、御子一人モマシマサズ（中略）スグニ長谷寺ヘ参詣アツテ一七日ノ間通夜ニ祈願シ玉フニ何ノ示現モナシ（中略）後ノ七日満ゼントスル暁ノ夢中ニ正ク示現シテ言ク（中略）果シテ紫之前程ナク御懐胎アリシカバ…【巻一】
②	中将姫誕生の場面	有 4	天平十九年丁亥八月十八日、晨ニ日ノマサニ出ントスル時、母身ナヤムコトナク誕生アリ。【巻一】
③	花園遊覧の場面	有 8	姫君五歳ノ春、スデニ二月モ過、弥生初ノ事ナルガ、豊成公、折柄桃華ノ盛ナル由ヲ聞召テ、御台紫ノ前モロトモニ姫君ヲ伴タマヒ、御一門ノ人々ヲ誘引シテ、南園ニ遊覧アル。【巻二】
④	山下載則、継母に命じられ、姫を殺害せんとするが、父を思い留まらせようとした息子小次郎則重を誤って殺害してしまう場面	有 12	或時継母、我故郷ヨリ随ヒ来ル山下藤内載則ト云者ヲ側近ク招寄、小声ニ成テ申サル、ハ（中略）何トゾ汝今宵忍入、何者ノ仕業トモ知ヌヤウニ密ニ姫ヲ殺害セバイカバカリ嬉カルベシ（中略）然ルニ藤内カー子小次郎則重ハ当年十八歳若年ナリトイヘトモ其心賢ニシテ非道ニ与スル者ニ非ズ（中略）則重思ヒ同スニ、吾父如是思立ウヘハ如何程諫言シタリトモ、ヨモヤ思留ジ。所詮此上ハ我命ヲ捨ニヨリ外ノコトナシ（中略）則重声ヲカケ何者ナレバ夜更人静リテ御門内ニ忍入ルハ癖者ナリ。逃ジト太刀ヲヌキ、声ヲカクルモ怖シテ父ヲ追帰ン謀ナリ。父載則ハ吾子ノ小次郎則重トハ知ラズ、ヤレ番ノ者ニ見届ラレテハ、後日ノ為モ悪カルベシ。所詮討テ捨ント太刀引抜テ切テカ、ル。則重モ吾親ノ事ナレバ太刀打ハナラズ為方ナク、但太刀ノムネニテ受ツ流ツ…【巻三】
⑤	継母、誤って実子を毒殺する場面	有 24	十歳 去程ニ継母ノ産生セルトコロノ豊寿丸今年三歳ニナリ（中略）去年夏ノ比、山下藤内載則ヲ憑ミ、姫君ヲ殺害センコトヲ欲スルトモ、小次郎則重ガ忠勤ニテ、其本意遂ザレバ、継母ノ憤リ増々□ク、或時毒酒ヲ調ヘ長柄ノ鉈子ノ中ニ隔テヲナシ、右ニハ薬ノ酒、左ニハ毒ノ酒ヲ貯ヘテ、姫君ノ来ラセ玉フヲ待ニケリ。然ルニ姫君ハ豊寿丸ヲ慕ヒ、継母ノ居間ニ来ラセタマヒ豊寿丸ノ手ヲ取快ク遊び戯レ玉フニゾ（中略）次ニ豊寿丸ノ盃ニハ左ノ方ヲツガレシ故ニ飲ト忽チ顔色変ハリ、カツハト伏身モダヘシテ苦シガ、ウント云声バカリニテ、終ニ息絶死メケリ。継母仰天愁歎シ…【巻三】
⑥	継母の讒言（姫の不貞）により、雲雀山で姫、松井嘉藤太により殺害されんとする場面	有 34	継母ニハ兼テ巧ミ置ケル事ナレバ松井嘉藤太トテ強壮ノ武士ヲ語ヒ、中将姫非法ノ大科アル間、紀伊国有田郡雲雀山ハ手前ノ知行所ノ内ナレバ、誰尤ルモノアラジ。彼處ヘ連行テ密ニ討テ捨ベシ（中略）西ニ向ヒ御手ヲ合セ念仏シテ待セ玉フニ、少間アレドモ剣ヲ加ヘズ。姫君後ヲ顧玉ヘバ、嘉藤太剣ヲ地ニ抛捨テ伏居タリ【巻四】

【表2】中之坊絵伝・奥院絵伝・『行状記』
対応表。奥院の番号は図番号を示す。

	中之坊絵伝	奥院	『行状記』
⑦	小袖に自分の血をつけ、姫の斬首を証明しようとする嘉藤太の話を聞いた家老国岡将監は、継母を説得するためには首が必要であると考え、自分の娘である瀬雲を身代わりとして斬首し、首を嘉藤太に預ける場面	有 35	拟藤太思案シテ見ラレヨ。カタノコトク怖ク、無端継母ノ意ナレバ、小袖バカリノ證ニテハ中々合点セラレマヒ。直ニ討タル首ヲ見ズハ疑ヒヲ残シテ重テ亦彼山中ヲ穿鑿シテ搜出シテ、再ビ如何様ナル憂目ニ逢玉ハンモ知ヌ事ナリ。(中略)我ニ一人ノ女アリ。瀬雲ト名ツケ、当年十四歳ニシテ姫君ト同年。幸ヒ生質モ相似タリ。是ヲ御身代ニ立ツベシト思ヒ定メテ……汝此度姫君ノ御身代ニ立ナバ、今生ニテハ主君ノ忠義、来世ニテハ去年ワカレシ母ニ速ニ対面シー蓮ノ台ニ救ヒ拳ラレン、如何思フヤト云ヒケレバ、娘聞テ何ガサテ御主様ノ御為ニナリ、母上ニモ速ク逢奉ルコトナラバ、命ハ惜カラズ。早々首ヲ討玉ヘトテ筆ヲ染、カクテ今君ガ命ニ代ル身ヲ迎ヘ玉ヘヤ弥陀ノ御国ニト辞世シテ頸サシノベテ清ク討レ朝ノ露ト消ニケル。将監涙ト共ニ討タル首ヲ血痕ニテ汚シ、嘉藤太ニ渡シ遲リナバ…【巻四】
⑧	雲雀山へ狩りにきた豊成が姫と再会する場面	有 40	一日御心晴シニトテ遊獵ニ出玉フガ、紀州鶴山ニ多ノ鳥獸アルコトヲ聞召、直ニ彼處ニ赴キ玉ヘバ(中略)茅ノ菴アリ。其内ニ容色美麗ナル女子、四十許ノ婦ト共ニ居タリ。(中略)我愚体ニシテ他人ノ偽言ヲ信トシ、罪ナキ姫ヲ失ハントセシ所ニ、天道未タ我ヲ捨玉ハズ。今再ビ汝ガ面ニ対面スル事、誠ニ老後の幸ト御歎ビハ限ナシ。【巻四】
⑨	豊成公の邸に姫が戻ってきた場面	有 41	姫君ヲ伴ヒ松井カ後家諸共ニ御帰宅アレバ御親族ハ申スニ及ハズ、上下悦ビサ、メキケル【巻四】
⑩	姫が龍田川の鳴動を止める場面(姫の奇蹟)(※本来は⑥の前にある場面)	有 31	然ラバ属日、龍田川夜夜ニ鳴動シテ其音朝庭ニ響キ亘テ諠ク、帝ノ御悩トナル。……姫君此勅ヲ受ケタマフトイヘドモ少モ傷玉フコトナク即チ御父豊成卿へ事ノ由ヲ訟ヘ玉ヒ、御乳母ヲ初メ、其外数多引具シテ龍田川ニ急ギタマフ。姫君、彼處ニ到テ……浪ハヨシタツ田ノ川モ音ナクテ天ノ皇ノ悩ヤメテヨ如斯詠ジ玉ヒテツツ石ニ書列テ川ノ中ニ投入玉フニ忽チ鳴動止テ其音静レリ。【巻四】
⑪	中将姫が当麻寺へ入寺する場面(※奥院本は剃髪場面を描く)	有 44	如此姫君ハ御父豊成卿へ書置ヲ残サレ、其日ノ暮ル待玉ヒ、漸ク人モ定レバ、下部モツレズ只一人御屋形ヲ忍ヒ出タマヒ(中略)夜モスデニ明ケレバ、由アリゲナル僧房ニ入テ剃髪ノ事ヲ願セ玉フニ…【巻四】
⑫	姫、菴室で暮らす場面(大蛇が現れる)	無 45	然ルニ其比何国ヨリトモ知ズ四十餘ノ尼公来テ、当麻寺ノ境内ニ新ニ小菴ヲ結ビ閑居シテ念仏セラレケルガ、姫君ノ事聞及ヒ、誠ニ年若女性ノ深キ思入最殊勝ナリ。門前在家ハ雑縁多シテ修行ノ障トモナルベシ。吾菴室コソ誰問来ル人モナク物静カナレバ、互ニ脆ヲ極ヒ危ヲ助テ同行トナリ共ニ西方ノ淨業ヲ修シ念仏唱候ハント有シカハ、姫君是ハイカナル仏ノ御引合ゾト御悦ビ斜ナラズ、即彼尼君ノ菴室ニ至リ、昼夜懈リナク心静ニ念仏シ玉フナリ【巻四】
⑬	中将尼公が蓮糸を取る場面	有 46	老尼ノ曰ク、然ラバ百駄ノ蓮茎ヲ求ラレヨ御身ノ願成就スベシト(中略)老尼及ビ法如両尼共ニ蓮ノ茎ヲ折テ、茎中ノ糸ヲ繰出シ…【巻五】
⑭	蓮糸で曼荼羅を織る場面	有 49	年ノ程廿五歳ノ容貌端嚴ナル女性一人来テ老尼ニ向ヒ蓮糸調ヒ出来セリヤト尋ラル。(中略)今夜織立申スベシトテ、機ノ道具ヲ本堂ノ西北ノ角ニ構テ…【巻五】

【中之坊絵伝⑪】中将姫が当麻寺へ入寺する場面。奥院絵伝第 44 図、『一代記』第 7 図に見られる。

【中之坊絵伝⑫】姫が菴室で過ごす場面。姫が菴室で過ごす場面は、奥院絵伝第 45 図のように、剃髪後の場面として描かれており、中之坊絵伝の構図は、他の絵伝には見られない。また、大蛇の姿は奥院絵伝にも『行状記』にも見られない。中之坊絵伝の特徴として注目できる場面である。

【中之坊絵伝⑬】尼となった姫が、蓮から蓮糸をとる場面。奥院絵伝第 46 図の場面に近いが、中之坊絵伝は尼となった姫が一人で蓮糸を取る姿が描かれており、化尼の姿も描く奥院絵伝とは構図が異なっている。

【中之坊絵伝⑭】蓮糸で曼荼羅を織る場面。この場面は、多くの絵巻や絵入り本にも見られる場面であり、奥院絵伝第 49 図、『一代記』第 8 図にも見られる。

奥院絵伝、『行状記』、『一代記』と比較しながら、中之坊絵伝が描く場面について述べてきた。各場面の検討から、中之坊絵伝の特徴として、①奥院絵伝と描く場面に共通性はあるが構図の一致度は高くなく、奥院絵伝にない場面も含まれていること。②蛇身となった継母の話が絡められていること。③他の伝本に見られる曼荼羅講説と中将姫往生の場面を描いていないこと。以上三点が指摘できる。

蛇になった継母

それでは、今述べた中之坊絵伝の特徴について具体的に検討していくことにしよう。まず、中之坊絵伝が『行状記』に近い内容を絵画化していながら、蛇身となった継母の話を含んでいる点について考えてみたい。

そもそも、継母の役割は、執拗なまでの継子（中将姫）に対するいじめにあり、継母のその後について詳述する中将姫説話は殆ど確認できない。【表 3】にあるように、広島大学図書館蔵『中将姫』（横型絵入り本 2 冊）に「さて、けいほをは、もとのかたへそおくり給ひける」と継母追放の下りが記され、刈谷市中央図書館村上文庫蔵『中将姫物語』（写本 1 冊）というやや異なる伝本に「みたいとめのとのねうはうをとらへ、いかめしきおけにいれ、くちなわをおほくあつめ、みたいとめのとをいれたるおけへいれ、ふたをしこめておき給へは、いたわしや二人のねうはう、わめきさけふ」と蛇責めに遭う継母と乳母の女房の様子が記されているのが僅かな例である。一方、古浄瑠璃では姫君が自らの館に継母を

[illegible]

【表3】継母のその後に関する記述一覧

寄せ、孝を尽したことが記されており、姫の孝行心が強調されている。また、『行状記』には「継母ハ流石ニ巧ノ恥シカリケン故郷ニ奔去テ、其身ヲ隠セリトナン」とあり、継母が自ら身を隠したことが記されている。

さらに、田中美絵氏が詳述されているように、説経浄瑠璃『中将姫御本地』には入水後蛇身となった継母が登場する。⁸ 蛇身となった継母は中将姫の説法を妨げようとするが、姫による法華経供養によって成仏するという展開になっている。田中氏が指摘されるように、姫が仏法の力によって大蛇を救済するという展開は、説経浄瑠璃『まつら長者』にも見られる。説経浄瑠璃『まつら長者』では、大蛇の生贄になるところだったさよ姫が法華経の功德によって生贄を免れ、大蛇は姫によって救済される。説経浄瑠璃『中将姫御本地』では、中将姫は女人往生を説く以前に、継母（衆生）を救済する高僧のような存在として語られている。

説経浄瑠璃『中将姫御本地』は、継母が蛇身となる点で中之坊絵伝に近似している。説経浄瑠璃『あいごの若』でも継母が大蛇となって現れるが、そもそも、女性が執心によって蛇身となる話は、一連の道成寺説話が知られるほか、『発心集』巻50「母、むすめを妬み、手の指蛇になること」などもその類例として挙げられようし、数多く見られる。お伽草子『磯崎』（デンバー美術館蔵・絵巻2巻）には「かの女はうにかきらす、物をねたみにくみ給ふならば、人をころさすとも、そのおもひつもらは、おにともしや共なりたまふへし」と女が嫉妬心ゆえに鬼とも蛇ともなることが記されている。奥院絵伝第26図で、豊寿丸を失った継母が姫に対する嫉妬を一層深くする場面では、継母は大蛇の姿でこそ描かれていないものの、お伽草子『磯崎』の女が鬼面をつけ取れなくなったその形相と同様に描かれており面白い。このように、女性の執着心を強調しつつ、それをいわば方便として、功德や救済を語る物語の手法からは、唱導・説法の様相が垣間見えることが指摘されている。⁹

説経浄瑠璃『中将姫御本地』の展開

17世紀後半以降の中将姫説話に関わる文学作品を見ていくと、そのうちのいくつかに継母が蛇身となるという展開が認められる。中将姫説話において蛇身となった継母の話は、延宝・元禄頃と推定される説経浄瑠璃『中将姫御本地』¹⁰のほか、元禄12年（1699）の狂言本『当麻中将姫二代記』（大坂荒木与次兵衛・片岡仁左衛門座本興行、大東急記念文庫蔵）、18世紀中頃の成立



【図4】狂言本『当麻中将姫二代記』（大東急記念文庫蔵）

と推定される青本『中将ひめ』（東北大学附属図書館狩野文庫蔵）、嘉永5年（1852）の浄瑠璃『鶴山姫捨松』（初演 11月、江戸市村座、早稲田大学演劇博物館蔵）などにも見られる。

狂言本『当麻中将姫二代記』【図4】では、継母の死後、継母の実の子どもであったさよ姫が、また新しくやってきた継母にいじめられるという、従来には見られない展開となっている。継母は、自分の実の子が虐められていると知り、因果応報を嘆いて蛇となる。

たちまちへびとなり、ふしきのあなに入にける。今も世迄もねざしの松、へびのすむるんゑん是也

とあるように、挿絵右上には、松の木に巻きつく蛇が描かれている。新しくやってきた継母は、その後引き裂かれて討ち殺される。青本に登場する継母も、狂言本に登場する継母も、いずれも悲惨な末路を辿っている。

青本『中将ひめ』【図5】では、継母は入水自殺することになっている。姫は当麻寺に入り、中将法如となり、曼陀羅を織り上げるが、説経浄瑠璃同様、説法がなされる際、大蛇となった継母が説法を妨げる。向かって左上に説法する中将姫が描かれ、中央には大蛇が描かれている。やがて、法女が大蛇に経を投げつけ念じ、大蛇を退け、継母は成仏する。



【図5】青本『中将ひめ』（東北大学附属図書館狩野文庫蔵）

中将法女、たへま山にてせつ法ありしとき、身をなげいたるまはい、大じやと成、とびきたる。だんきをさまたぐる。／のう、こはや、かなしやく。／御経をなげ付たまふ。／うらめしやちうぜうひめ。いまをもしらせんと大じやとびかる所。／さんけいの人々、きもをけす。／法女ぜつ法をときたまふ。いかにじやしんによぜちくせうほつばだい。うらめや、うらめや。

浄瑠璃『鶴山姫捨松』第5段【図6】では、継母の策略に翻弄され自害した夫の代わりに復讐をすべく継母から仏像を取り返した妻さらしなが継母を刺し殺すという、御家騒動ものとなっている。継母の非業の死を知った姫は、継母の菩提を弔うべく出家し曼荼羅を織り上げるという展開である。

「エ、おとましの継母づらめ。殺した私へは仇せず弱味へつけこむ卑怯な妄念。祈とばすぞ待ていよ」と験者迎ひに走ゆく。げにも継母の執念か。松が枝つたふ小蛇、鎌首もつ立紅の舌をふりたて、尼公にくらひつかんと吭を、狙ひよるこそ恐ろしき。よせじと桐の谷機竹追取、たきかれば跡へひく。のけは頭を又ずつとのばすを見返り「エ、にくや。あたしつこい」とふり上ふり上たけば、尼公「ノウ是々、母様の亡執ならば構て打擲する事なかれ。南無春月院妙雪信女ゆるさせ給へ」と合掌の、胸元めがけ蛇がまとひ、さがるを浮舟追たて「是継母の亡念殿、邪慳なこなたを浮ませふと。此曼陀羅を手



【図6】浄瑠璃『鶴山姫捨松』第五段(早稲田大学演劇博物館蔵)

向の機織。それ故死骸を葬りし。元興寺の玄昉殿に戒名かかせてはお肌に」
と中将法女の御首にかけ給ひたる守を取出し…

「継母の執念」によるものか、松の枝にいる小蛇が尼公にくらひつかんと吭を狙っているとあり、挿絵でも「ままははのもうねん」と記され、蛇が描かれている。

このほか『雲雀山中将姫和讃』（成立年未詳）¹¹には、

猶も母は邪見となり	これより姫を連帰り	猶も憂目を見んとて
継の母とのひの刃ば	刃光奈落の種となり	給ふ其怨念の邪心より
大蛇となりて姫君	を悩ませ給ふ其有様の	身毛もよだつ許なり
姫君は唯幻となり唱給	普門品爾時無尽意菩薩即從座起担右肩合掌向と	
唱へ給ば不思議やな	母の心も休まりて	大蛇も退き中将姫

とある。このように「怨念の邪心」によって「継母」が大蛇となる下りは、説経浄瑠璃以降の展開を踏まえたものと考えられ、邪心により蛇体となった継母の救済譚（大蛇済度譚）が、唱導の場で積極的に語られていたであろうことを示唆する例として捉えられよう。

語りとパフォーマンス

中之坊絵伝を前に語り伝えられた中将姫説話は、『行状記』の内容に拠りつつも、説経浄瑠璃以降受け継がれた蛇身となったその後の継母の話を踏まえるなど、近世期に広がった中将姫説話・伝承を重層的に享受したものであったことがうかがえる。近世期、中将姫の存在は、民衆を救済する存在となっていた。説経浄瑠璃をはじめいくつかの例で確認してきた蛇身となった継母を姫が救済するという展開や、姫が龍田川で鳴動を止めるといった奇蹟からは、お伽草子には見られなかった民衆を救済する中将姫像が看取される。民衆を救済する中将姫像が伝えられていく様相は、近世期、掛幅絵や版本などの挿絵に中将姫を追慕し往生を願う民衆の姿が描きこまれる傾向が顕著に認められるようになっていくことと関連づけて捉えられよう。ミシガン大学美術館蔵『当麻寺曼荼羅』（一幅、17世紀中頃制作か）もその一例として捉えられる。¹² 中之坊絵伝に描かれた姫の奇蹟の数々は、近世期に広がった民衆を救済する中将姫像と重なる。

周知の通り、中将姫説話はもとより当麻曼荼羅と一具で享受されるものだった。そのことは、南北朝～室町初期間成立と思われる『当麻曼荼羅』（個人蔵）などの事例からもより具体的に窺い知ることができる。¹³ この曼荼羅の左右には、当麻寺縁起と中将姫説話に関する縁起絵が描き添えられており、曼荼羅享受の場と説話享受の場が重なり合うものであったことが明示されている。

このほか、中将姫説話享受の場を具体的に窺わせる例として、東北大学附属図書館狩野文庫蔵『中将ひめ』（横型絵入り本、元和4年〈1624〉頃制作）が興味深い事例として挙げられる。末尾に「曼荼羅の和歌」や「軸竹の和歌」といった御詠歌を添えており、中将姫説話享受の場が談義の場と重なり合うものであったという痕跡を残したテキストとなっている。

この^{たへま}当麻の^{まんたら}曼荼羅は、当年^{こう}頃までに八百六拾年ほとなり申と聞こへたり。
 ／伊勢太神宮御詠歌^{あみたつとな}阿弥陀仏唱ふる人のむなしくは我^{われ}この国の神とよはれし
 ／八幡大菩薩御詠歌古^{いにしへ}の我か子を人のあらはして南無^{なむ}阿弥陀^{あみた}仏といふそ
 嬉^{うれ}しき／春日太明神御詠歌またも又あらはや人に教^{をし}へへき南無^{なむ}阿弥陀^{あみた}仏のむ
 つのほかには／^{まんたら}曼荼羅の^{うた}和歌^{みな}皆人のあやしかりつる^{こくらく}極楽を^お織り表^{あらは}してまこと
 をそ見る／^み軸竹の^{ちくたけ}和歌^{うた}この寺になにわうさしわう一^{ひと}よ竹なにいみむかと二夜とふ
 らし

中将姫説話については、寺社でどのように語られたかを書きとどめた写本も僅かながら残されている。『中将姫物語』上冊（巻末「府中阿弥陀寺住秦武観定用」・成立年未詳）には「継母ノ身ノ上ノ騒動ハ次ノ御咄ニシテ致シマ正」と口語体で記されている。¹⁴ 下冊は残念ながら現在所在不明となっているが、継母のその後についても語られていたであろうことはほぼ間違いない。先に述べた、『雲雀山中将姫和讃』に見られるような蛇体となった継母の救済譚（大蛇済度譚）が記され、語られていた可能性も十分に考えられる。

中之坊絵伝の特徴として、曼荼羅講説と中将姫往生の場面がなく、化女（観音の化身）による曼荼羅織成の場面を最後の場面としている点は注目できる。この特徴は何を意味しているのだろうか。この点について具体的に記した資料は今のところ確認できない。しかし、中之坊絵伝が曼荼羅と一具で享受されていたと考えるならば理解しやすい。中之坊では曼荼羅講説の前に絵伝を用いて曼荼羅の由来（中将姫をめぐる数々の奇蹟）が語られていたことから、絵伝には必ずしも曼荼羅講説の場面が描かれる必要性はなかったのではないか。それゆえ、曼荼羅講説の前場面である曼荼羅織成の場面までが描かれたのではないだろうか。曼荼羅講説を前に、曼荼羅の由来をめぐる奇蹟や中将姫による民衆教化・救済を語り伝えることを目的として絵伝は制作された可能性が高い。そのような絵伝の制作背景が、中之坊絵伝の場面構成や内容から窺えるように思うのである。

[付記]

本稿は、研究集会“Publishing the Stage: Print and Performance in Early Modern Japan” (University of Colorado, Boulder, March 5, 2011)での発表をもとにしている。貴重な機会をお与え下さったケラー・キンブロー先生、嶋崎聡子先生をはじめ、御教示いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。また、調査および掲載の御許可を賜った当麻寺中之坊副住職松村實昭師及び諸機関に記して御礼申し上げます。

注

1. 当麻寺奥院蔵『中将姫絵伝』奥院本四幅。①142.8×80.3cm, ②142.9×80.3cm, ③142.5×80.3cm, ④142.8×80.4cm, 明和4年(1767)制作。当麻寺縁起は描かず、姫誕生から往生までの、いわゆる中将姫説話のみを絵画化した絵伝。『中将姫行状記』に拠り、65場面を描く。奥院絵伝については、元興寺文化財研究所『中将姫説話の調査研究報告書』1983に全四幅の図版が掲載されている。

2. 田中美絵氏「説経浄瑠璃『中将姫御本地』の成立」『伝承文学研究』51号、2001。「中将姫説話の近世—勧化本『中将姫行状記』を軸に—」『伝承文学研究』53号、2004。
3. 鳥居フミ子氏「中将姫説話の近世演劇化—土佐浄瑠璃「中将姫」を中心にして—」『日本文学（東京女子大学）』67号、1987。
4. 横山邦治氏「勧化ものの展回相について（Ⅰ）—『中将姫行状記』と『中将姫一代記』と『読本の研究—江戸と上方—』風間書房、1974。
5. 当麻町史編集委員会編『当麻町史』当麻町教育委員会、1976、792頁。
6. 『当麻寺の版本—護念院・中之坊・奥院—』元興寺文化財研究所、1996。
7. 中之坊絵伝に関する先行する指摘に、元興寺文化財研究所『中将姫説話の調査研究報告書』1983、42頁がある。参照されたい。
8. 注（2）『伝承文学研究』51号論文参照。
9. 恋田知子氏「室町の道成寺説話—物語草子と法華経直談—」『仏と女の室町』笠間書院、2008。
10. 末尾に「右物太夫直之正本也」「大伝馬三丁目鱗形屋孫兵衛門」。板行年時なし天満八太夫系の正本を刊行したものと考えられている。
11. 藤井佐兵衛氏編『仏教和讃五百題』山城屋、1916。条汐里氏「辻堂茂兵衛資料館蔵『当麻中将姫和讃』解題と翻刻」『立教大学大学院日本文学論叢』10、2010。
12. 所蔵品タイトルは、Taima Temple Mandala: Amida Welcomes Chūjōhime to the Western Paradise(2002/1.169)とある。現在、ミシガン大学美術館のホームページで画像を公開している。<http://quod.lib.umich.edu/m/musart?page=index>。
13. 拙稿「当麻曼荼羅と中将姫物語—物語絵の享受」『日本文学』58、2009。
14. 横山邦治氏「勧化ものの展回相について（Ⅰ）」『読本の研究—江戸と上方—』風間書房、1974。『当麻中将姫勧化辨述鈔』（滋賀県高島郡安曇川町・真光寺〈真宗大谷派〉天明9年〈1789〉）も類系の談義本である（徳田和夫氏「紹介『当麻中将姫勧化辨述鈔』（内題）一付・翻刻—」『絵解き研究』16、2002 参照）。